第二十七回「三土新明会」

こけし開拓史（其ノ四）

-スモールワールドからの脱却-

Oct. 21, 2017

橋本　正明

⑦	渡辺鴻(明治37年？生)	• こけしの二次流通時代への対応
⑥	深沢要(明治37年生)	• 工人個人史への関心　産地訪問への執着 • 顔の見える工人像（工人追求）
⑤	橘文策(明治31年生)	• 蒐集家の組織化　頒布会　機関紙の定期発行 • 木地師、民俗への関心の拡大
④	石井眞之助(明治26年生)	• こけしの発掘　アルケオロジーへの関心
③	武井武雄(明治27年生)	• こけしの評価　評論の対象 • こけしの出来について識別
②	天江富弥(明治32年生)	• こけし作者、系統の識別 • 呼称の起源　方言区
①	竹馬会･集古会時代	• こけしという人形玩具のカテゴリー • 産地の識別

こけし蒐集の進展

戦後：日本復興期のこけしの危機

新型こけしと創作こけしの台頭

新型こけし（観光地土産）

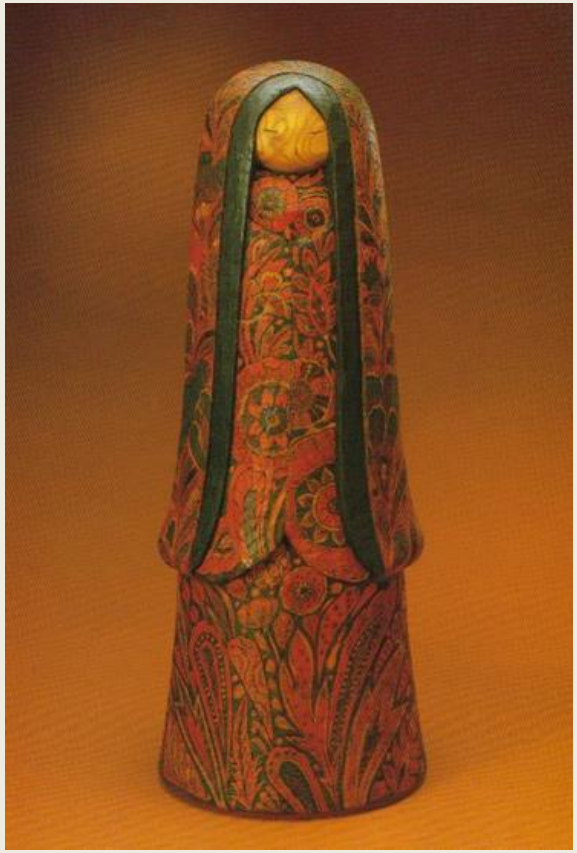
戦争から開放されて、戦後の旅行ブームが起こると
日本各地、津々浦々の観光地でお土産用として安価な
大量生産のこけし人形が売られるようになった。
伝統こけしの工人たちも、この新型こけしの製作や
下木地作りに動員された。
さらに、新型の甘い媚びた表情が伝統こけしの表情に
まで影響を与えた。

戦後：日本復興期のこけしの危機

新型こけしと創作こけしの台頭

創作こけし（工芸作家）

一方、戦後洋風建築が増え、モダンな内装の家が多く作られると、伝統こけしは合わないと思う人が多くなり、洋風居室のインテリアとして、創作こけしが歓迎されるようになった。
作者は工芸作家と呼ばれた。
総理大臣賞を贈る創作こけしのコンクール（群馬）も始まった。



石原日出男
「萬花」
日本こけし工芸会

如何にして危機と対峙したか？

新型こけしと創作こけしとの峻別

1. 「伝統」こけしの概念規定
   - 祖形は江戸末期に発生・確立
   - 発生から様式が系譜として継承されている

     ⇒　伝統文化を担保するものとしての系統論

系統論　その背景と経緯

1. 〈こけし這子の話〉　天江富弥
   - 木地師の系統として分類
     岩代キンジヤマ系・岩代土湯系・
     陸前熊沢系（弥治郎系・新地系・堀田系）・
     陸前中木地山系・羽後木地山系・陸奥温湯系）
2. 橘文策　木地師の分類からこけしの分類へ
3. 〈こけし襍記〉〈こけし・人・風土〉　鹿間時夫
   - 系統発生という章立ての中で議論
   - 「木地師に系統があるから、その文化遺産としてまた伝統のシンボルとしてのこけしには、必然的に系統が生じる。」

⇩

系統は、そのこけしの伝統性を担保するもの

鹿間時夫は古生物学・系統分類学の専門家

1931年（昭和6年）～1939年（昭和14年）東北大帝国学地質学教室で葛生化石動物群について調査。ニホンムカシジカやクズウアナクマなどの新種11種発見。

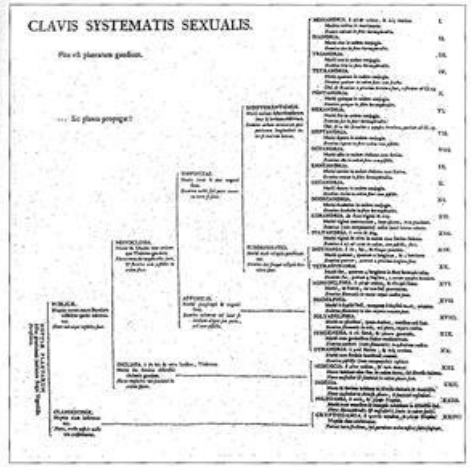
1950年（昭和25年）東北大学理学博士。横浜国立大学教授。古生物学研究。

系統論　その理論

分類学

- 系統分類学
  - 分岐分類学（Cladistics）
  - 進化分類学（Evolutionary Taxonomy）
- 表形分類学（Phenetics）

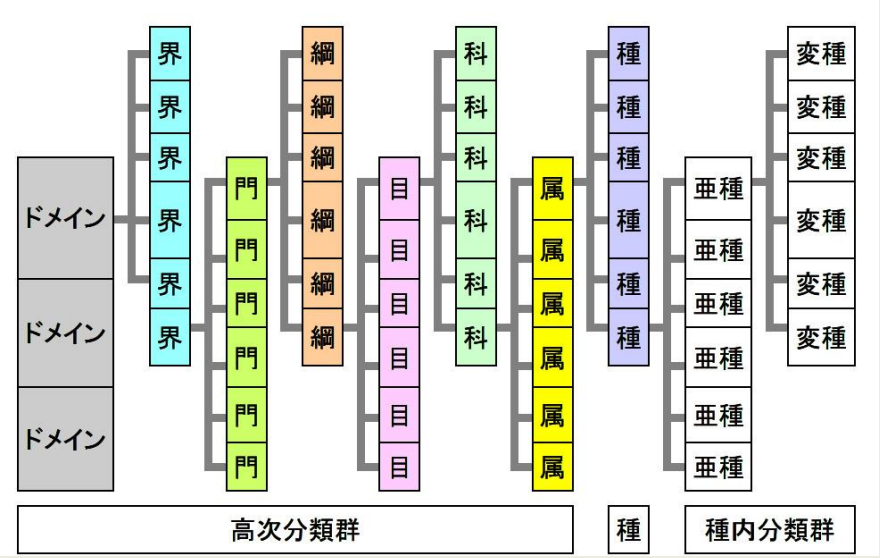
Carl von Linné
の植物分類



系統分類の例

和名	英名	ラテン語名	例:ヒト	例:ローズマリー	例:エノキタケ	例:大腸菌	例:*A.* ペルニクス
ドメイン:	domain:	regio:	真核生物	真核生物	真核生物	細菌(真正細菌)	古細菌
界:	kingdom:	regnum:	動物界	植物界	菌界	なし	プロテオ古細菌界[1]
門:	phylum /division:	phylum /divisio:	脊索動物門（脊椎動物亜門）	被子植物門	担子菌門	プロテオバクテリア門	クレン古細菌門
綱:	class:	classis:	哺乳綱	双子葉植物綱	菌蕈綱	γプロテオバクテリア綱	テルモプロテウス綱
目:	order:	ordo:	サル目	シソ目	ハラタケ目	腸内細菌目	デスルフロコックス目
科:	family:	familia:	ヒト科	シソ科	キシメジ科	腸内細菌科	デスルフロコックス科
属:	genus:	genus:	ヒト属 *Homo*	ローズマリー属 *Rosemarinus*	エノキタケ属 *Flammulina*	エスケリキア属 *Escherichia*	アエロピュルム属 *Aeropyrum*
種:	species:	species:	*H. sapiens*	*R. officinalis*	*F. velutipes*	*E. coli*	*A. pernix*

右図は植物の系統分類の例
段階系統になっている。
科から属が生まれるが、科から科が分岐する事はない。
たとえば土湯系から中ノ沢系が分岐する事はない。
亜系は下位の階層だから
中ノ沢亜系の分岐はあり得る。



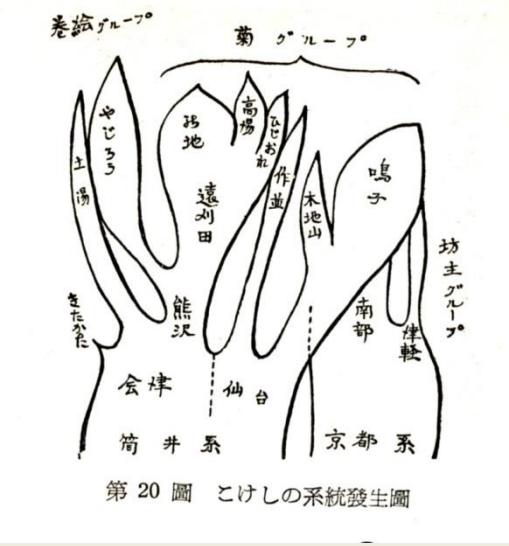
こけしの分類は天江富弥、鹿間時夫以来基本的に系統分類であった。
厳密に言うと、このアプローチは、こけしの発生から今日の系統に分化する時系列を考慮する分岐分類学あるいは、進化分類学にそって議論された。それゆえ時間系譜をもつこけしの伝統性が保証された。

系統分類学上のこけしの系統

系統分類学は発生から時間に沿って
分岐を辿る考え方で、系統樹が描ける。

こけしの系統分化

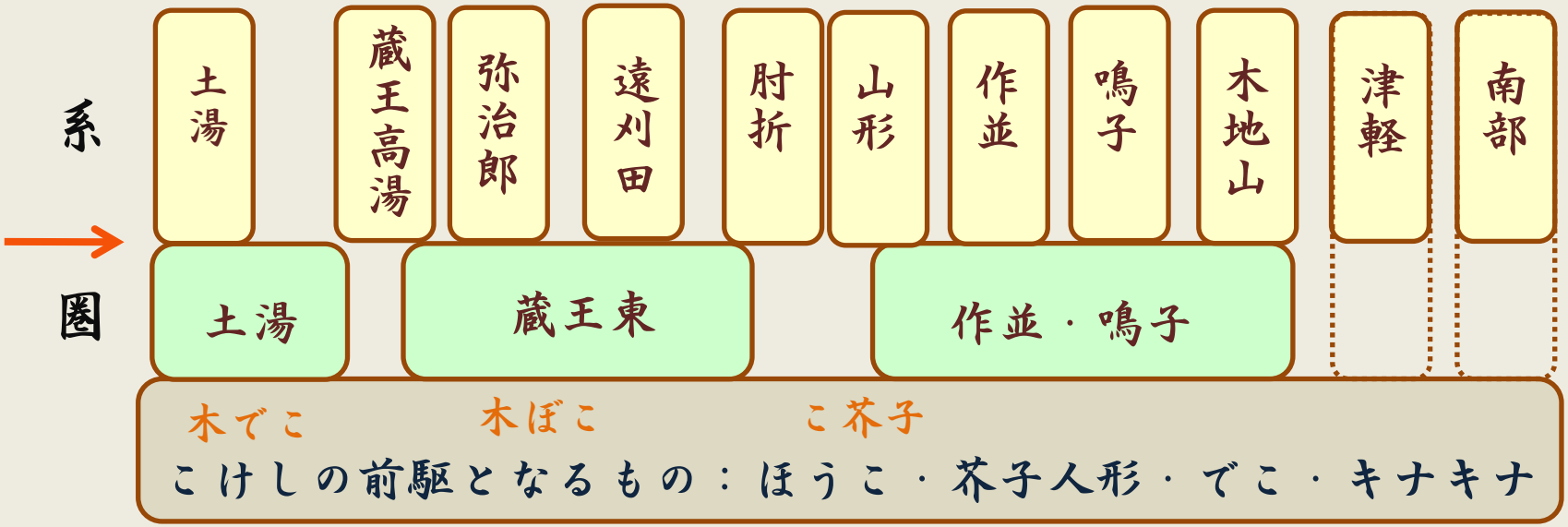
生物でカンブリア紀の爆発（門が出揃う）が起こったのと同様に、二人挽きから一人挽きへの技術革新が契機になって明治17年～23年ころにこけし様式の爆発（系が全部出揃う）が起こったという状況を想定している。



第 20 圖　こけしの系統發生圖

鹿間時夫による
古典的系統樹

一人挽き技術による系の分岐



閑話休題　中ノ沢の系統に関する議論

中ノ沢こけしは伝統こけしかという議論

西田峯吉の困惑〈鴻・7〉「中の澤の近況」

「中の澤は伝統なき産地として兎角蒐集家に親しまれない傾きがある。」
西田峯吉は昭和15年12月に中の澤を訪ねて、その伝統的ルーツを追求したが明確な答えは得られなかった。

伝統こけしとするためには何らかの系譜のつながりが必要で、もし蛸坊主が昭和初年の善吉一代の創作であるなら新型になってしまう。
善吉のこけしを伝統こけしとしたのは、「土湯から土湯峠を越えて根本藤吉（トンコジイサン）が中ノ沢に運んで売っていた土湯こけしの影響を受けてこけしを作り始めた、すなわち系譜の系が土湯に繋がっている」という判断があったからであった。
「中ノ沢こけしが土湯系ではなく独立に発生したとするなら、どこにも伝統の系は繋がらないので、昭和初期に発生した新型こけしとなる。」

ただし、**系統分類**ではなく**表形分類**を行うなら、時間軸は考える必要は無く形態特徴の独自性から中ノ沢グループは独立して扱える。系統分類ではないので「系」と呼ぶのは適当ではなく、「様式」「形式」といったカテゴリーとすべきである。海外では表形分類として「Style」「Group」などを使う。

如何にして危機と対峙したか？

新型こけしと創作こけしとの峻別

1. 「伝統」こけしの概念規定
   - 祖形は江戸末期に発生・確立
   - 発生から様式が系譜として継承されている
     ⇒ 担保するものとしての系統論
2. 展覧会
3. 古典への回帰　復元・写し
4. コンクール　（伝統的日本文化の位置づけ）
   - 昭和30年代　全国こけし祭り
     審査の第一は新型の審査対象からの排除
     （全日本こけしコンクールは新型部門を区別）
5. 本の出版
   - ガイド　（土橋慶三の戦略）
     本に掲載されたものだけが伝統こけし
6. こけしの会での教育活動

伝統こけしを護った仕組みの弊害

→ こけし界に権威者が生じさせた

- コンクール　（審査員）
- こけしの会での教育活動　（指導者）
- こけし入門書による工人の峻別
  - こけしガイドは、これに掲載されれば認められた伝統こけし工人、掲載されなければ新型かまだ一人前ではない工人
    ⇒　工人の生活に影響を与えた

- 神話化された伝統こけし像
  - 伝統こけしを護ることを使命とした人たちは厳格な伝統こけし像を作り上げて、工人たちにそれを要求した。蒐集家にも伝統こけし保護の原則を強要した。

神話化された伝統こけし像

- 伝統こけしはこうあるべき

昭和30～40年代の本流だった主張
（西田峯吉・土橋慶三・小野洸・柴田長吉郎）

1. 工人は父子相伝・師弟相伝であるべき
2. 個人の創作を排除して、先人の型を忠実に伝承したものであるべき
3. 作者の個性を無視することになるので、復元や写しは避けるべき
4. みちのくの精神である純真・素朴な心を理想としたものであるべき

ところが、これらはこけしの虚像であって実像ではない。
「伝統こけし」を護るために作られた虚像

- 〈こけすんぼこ・第4号〉平成6年6月
  「こけしの実像と虚像」　橋本正明

愛好家の反応

権威を肯定するもの

伝統の何たるかを知り尽くした人の判断に委ね、この世界を護るべきである

権威を否定するもの

伝統は時代によって、変わり生き延びるもの。
こけしを求める世界が活性化して初めて伝統は存続する。

〈こけし辞典〉への取り組みは、「こけしに関わる事象を網羅して体系化することによって、根拠の不明確な権威者の権威そのものを相対化する」という意図もあった。
（特に鹿間時夫の意図、権威者がつくった〈こけし事典〉への対抗）

〈こけし辞典〉が生まれる背景

第二次こけしブーム

- 古品は二次流通から三次、四次流通へ
- 新型・創作との勝負はほぼついた
- 高度成長：日本の伝統への自信と回帰、保存

みずき会　こけし研究ノート

〈鴻〉の鑑別の戦後版

昭和30～40年代の入札会ラッシュ

- 梅林新市、高山重城、枡岡良　備後屋
- 金井虹二　学習院同窓会館（昭和40年11月）
- 野々垣勇吉　吾八
- 鈴木凡太郎　トラック会館（昭和41年8月）
- 石井眞之助　備後屋

こけし手帖　名品こけしとその工人

こけし鑑賞

工人を中心とする情報体系の再構築

〈こけし辞典〉

従来のこけしの文献の記述

- 聞書、伝聞、口伝に基づく
  - 菅野新一、橘文策、深沢要、西田峯吉

→ 伝聞による記述は神話化を補強しやすい

こけし辞典の方針　（1）

- こけし工人を中心にして「完全なこけしの世界像」を記述する

- 一級史料を可能な限り探す
- 一級史料：その時代の当事者が直接関与して残したもの
  寺の過去帳、墓碑（金石文）、戸籍、古文書
  （原則は戸籍表記に従うことにした）

- 複数のデータをクロスチェックする（整合性）
- 既往の文献はすべて照査し、検証する

一級資料：過去帳

〈こけし辞典〉

こけし辞典の方針（2）

- 複数のデータをクロスチェックする（整合性）
  同じ時期同じ場所で仕事をした複数の工人聞書き

- 既往の文献はすべて照査し、検証する
  記述が比較的正確だった文献（矛盾が少ない）
  - ☆ 遠刈田青根新地の木地業とこけし（佐藤友晴著）
  - ☆ 羨こけし（深沢要著）
  - ☆ 蔵王東麓の木地業とこけし（菅野新一著）
  - ☆ 鳴子·こけし·工人（西田峯吉著）

  役に立った雑誌
  - ☆ こけし手帖　（執筆者による）
  - ☆ 土湯木でこ考
  - ☆ 鴻　（年代変化や鑑別を議論した最初の文献）

46年 9 月30日発売

こけし辞典

鹿間時夫監修

編集 鹿間時夫 中屋惣舜

執筆 鹿間時夫 白鳥正明 中屋惣舜 橋本正明 箕輪新一

徹底的に調査された詳細なこけし工人辞典

■本書は、総合的なこけし百科であるが、工人に関する基礎的知識の不足が痛感されている折から、その中心を工人に置いた。収録工人名は一千名におよび、人物・作品・伝統の順に詳しく解説した。

■工人の家系調査が実証的にされぬ限り、伝統や系譜は正確にはわからない。そのため、執筆者は現地の役所にて戸籍調査を行なって、人物の経歴を詳細に解説した。さらに、工人に直接採訪して、身辺のエピソードなども盛り込んだ。挿図八〇〇を収め、作風を示した。

■工人のほか系統・地名・用語・コレクションなど、こけしに関するあらゆる事項を細大もらさず収録した。付録に系統図・地図・文献を収む。口絵カラー八頁。

東京堂出版

A5判 580頁 定価4500円 〒170円

こけし辞典出版記念会

〈こけし辞典〉以後

- こけしという閉じた世界でやるべきことはやり尽くした
  （スモールワールド）
  工人経歴、作品鑑別、年代変化
- 残された研究は〈辞典〉の補遺をするくらいしかない

〈辞典〉後、重要な発見は
〈岩松直助文書〉

〈木の花〉へ

- こけしローカルのスモールワールドの自己満足に終わらない
  誰にでも通用する言葉、論理でのこけしの魅力の記述
  → スモールワールドからの脱却
- 〈こけし辞典〉の補遺と拡充　連載覚書　仙山紀行的なもの

木の花結団晩餐会（昭和48年）

スモールワールドからの脱却

- 〈木の花〉の雑誌の方針･性格議論

「スモールワールドからの脱却」を主張した論客

☆ **俵有作**：こけしだけしか見えない人はだめ（美しいもの一般）
☆ **橋元四郎平**：こけしの世界の人でなくても納得できる論説

二人の議論はまともだったが、実際にこの方針に沿って原稿を書ける人は限られていた。
俵、橋元両名も数号で種切れになった。
スモールワールドに終始する人もいた。
（年代変化・工人個人史：　中屋惣舜　矢内健次　北村勝史）

議論の時はニコニコ笑っていたが、この方針をまじめに最後までやったのは、**久松保夫**の「はうこ考」。
こけし以前に存在した豊饒な前駆体（はうこ）の文献記述を中心に網羅的に採集した。ただし、読むのには極めて労力を要するので読了した人は殆どいないかも知れない。

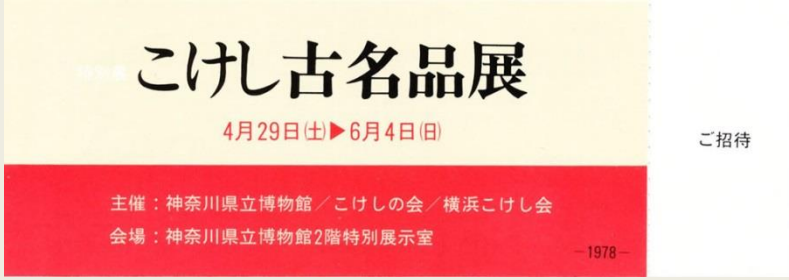
久松保夫：芸団協専務理事

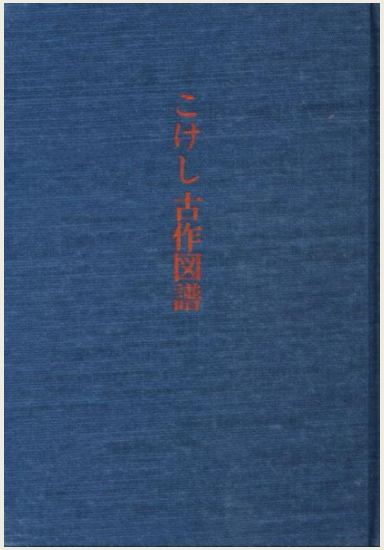
芸団協：昭和42年創立
　初代会長：徳川無声
　二代会長：坂東三津五郎
　三代会長：中村歌右衛門

ほうこは採り物であって、日本の芸能と深く関わっている

スモールワールドからの脱却

公的な博物館（神奈川県立博物館）での本格的な展覧会
図録として〈こけし古作図譜〉の刊行

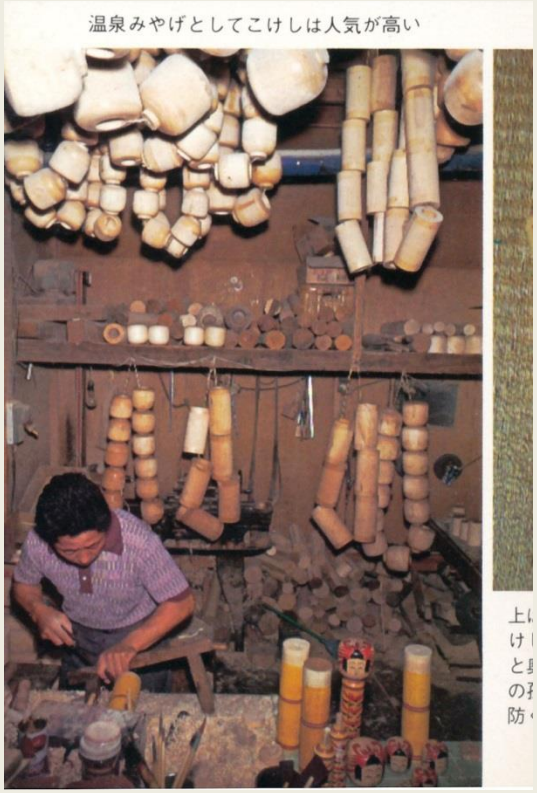

こけし古名品展
4月29日(土)▶6月4日(日)
主催：神奈川県立博物館／こけしの会／横浜こけし会
会場：神奈川県立博物館2階特別展示室
—1978—
ご招待



スモールワールドからの脱却

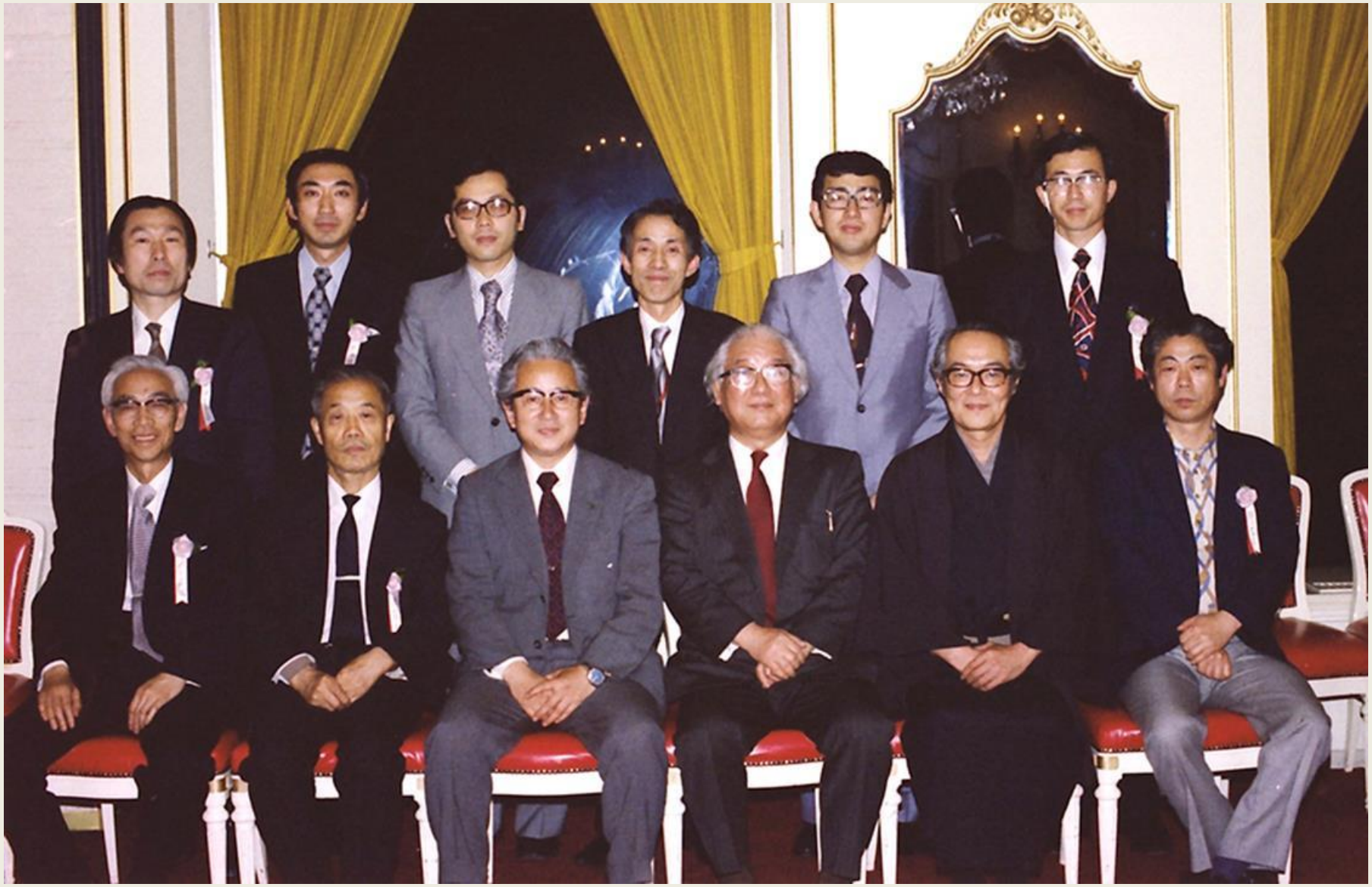
こけし愛好家の裾野を広げる　⇒　〈こけしの旅〉

1976年4月8日 平凡社



p.33 奥山庫治工房

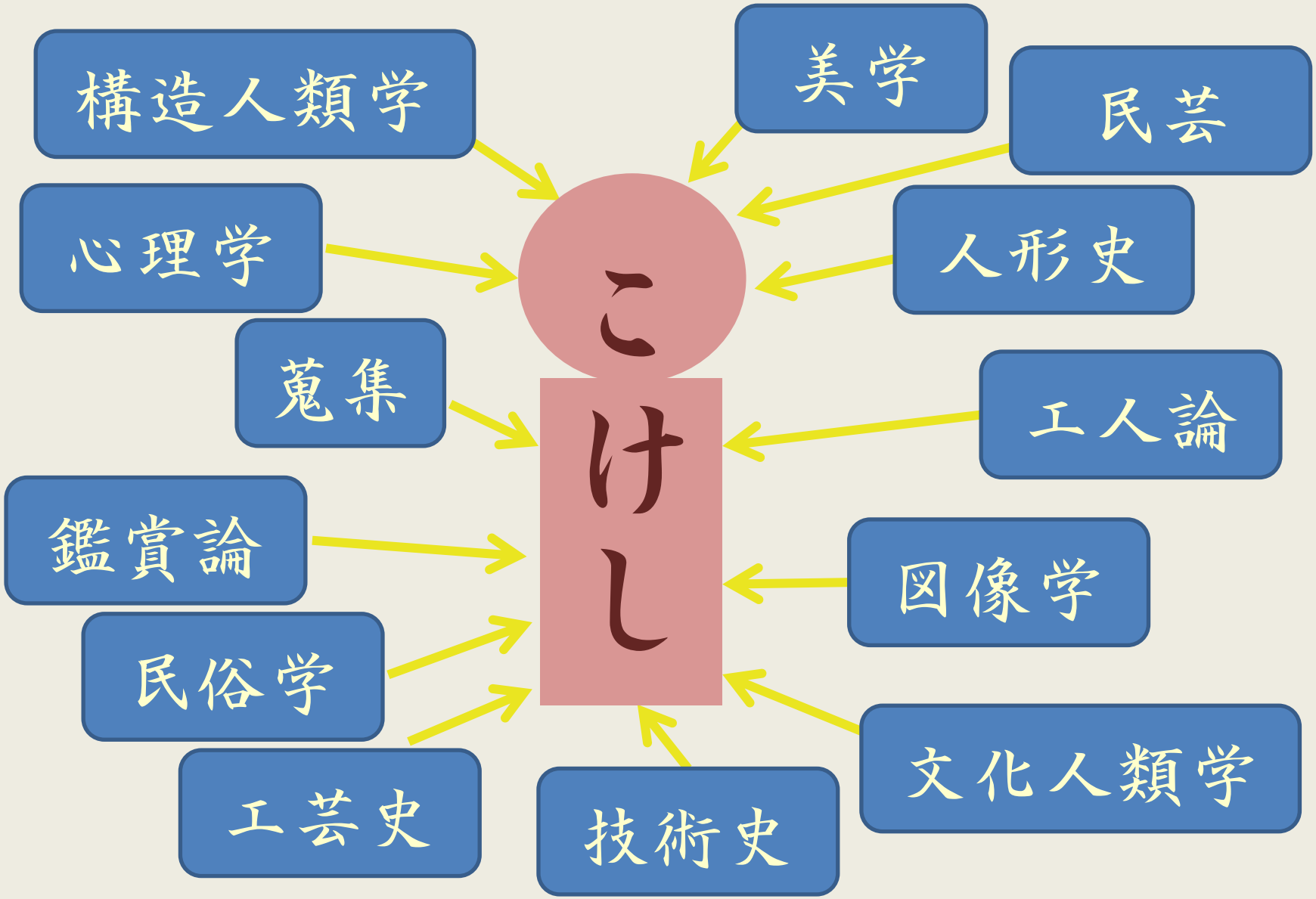
こけし、工人、産地の写真
〈こけし時代〉へ繋がる方向



＜こけしの旅＞出版記念会　昭和51年

スモールワールドからの脱却

世に通用する言葉·論理·コンテキストでこけしを追求

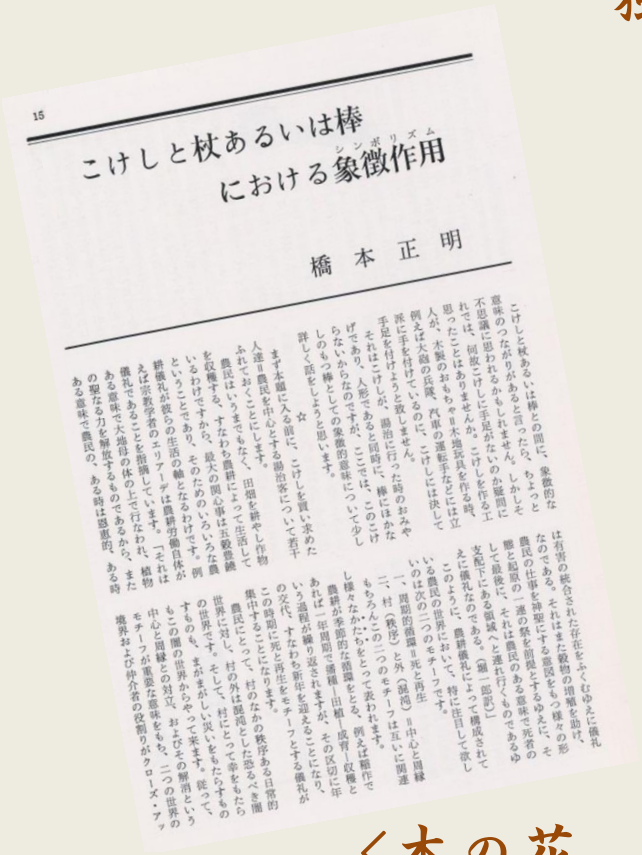


文化人類学

こけしと杖あるいは棒における象徴作用

独協大学　文化人類学講座　講義

昭和五二年六月二五日



15

こけしと杖あるいは棒
における象徴（シンボリズム）作用

橋本正明

こけしと杖あるいは棒との間に、象徴的な意味のつながりがあると言ったら、ちょっと不思議に思われるかもしれません。しかしそれでは、何故こけしに手足がないのか疑問に思ったことはありませんか。こけしを作る工人が、木製のおもちゃ＝木地玩具などには立例えば大鋸の挽鋸、汽車の運転手などには立手足を付けようと考えているのに、こけしには決して手足を付けようとも思いません。

それはこけしが、勤労に行った時のおみやげであり、人形であると同時に、棒にほかならないからなのですが、ここでは、このこけしのもつ棒としての象徴的意味について少し詳しく話をしようと思います。

☆

まず本題に入る前に、こけしを買い求めた人達＝農民を中心とする勤労客について若干ふれておくことにします。

農民はいうまでもなく、田畑を耕やし作物を収穫する、すなわち農耕によって生活しているわけですから、最大の関心事は五穀豊穣ということであり、そのためのいろいろな農耕儀礼が彼らの生活の軸となるわけです。例えば宗教学者のエリアーデは農耕労働自体が儀礼であることを指摘しています。「それは植物の聖なる力を解放するものであるから、また ある意味で大地母の体の上で行なわれ、ある意味で農民の、ある時は意識的、ある時は有害の統合された存在をふくむゆえに儀礼なのである。それはまた穀物の増殖を助け、農民の仕事を神聖にする意図をもつ様々の形態と結果の一連の祭を前提とするゆえに、それは農民のある意味で死者の支配下にある領域へと連れ行くものであるゆえに儀礼なのである。（『聖と俗』）」

このように、農耕儀礼によって構成されている農民の世界において、特に注目して欲しいのは次の二つのモチーフです。

一、周期的復活＝死と再生

二、村（秩序）と外（混沌）＝中心と周縁

もちろんこの二つのモチーフは互いに関連し様々なかたちをとって表われます。例えば輪作で農耕が季節的な播種と収穫、成育、収穫と年あれば一年周期で繰り返されますが、その区切に年という過程が繰り返されることになり、の交代、すなわち新年を迎えることになり、この時期に死と再生をモチーフとする儀礼が集中することになります。

農民にとって、村のなかの秩序ある日常的世界に対し、村の外は混沌とした恐るべき異の世界です。そして、村にとって幸をもたらすものも、まがまがしい災いをもたらすものもこの異の世界からやって来ます。従って、中心と周縁との対立、およびその解消という境界および外介者の役割りがクローズ・アップ モチーフが重要な意味をもち、二つの世界の

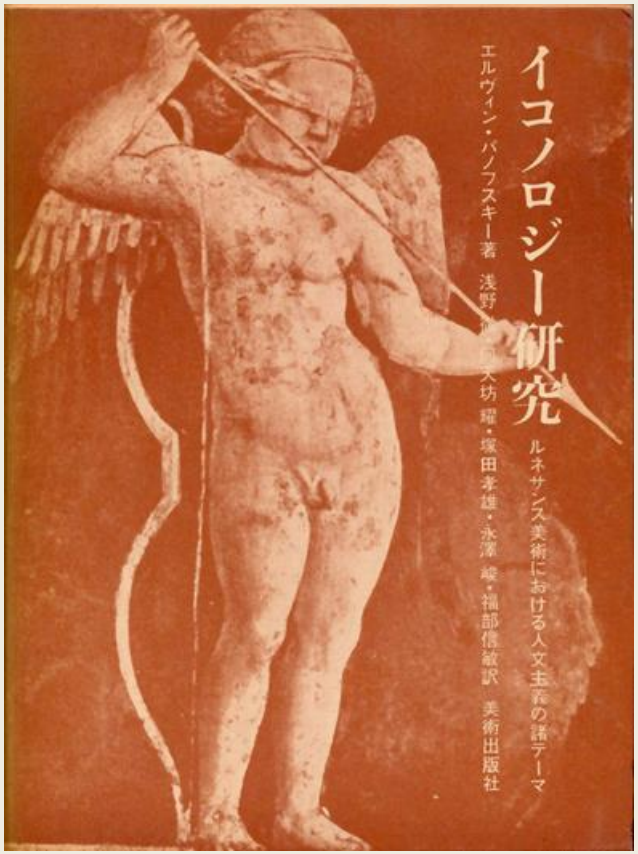
〈木の花　第14号〉

- こけしと杖あるいは棒における象徴作用
- 蛇ノ目と渦巻
- 花と豊饒

図像学

図像解釈学　Iconology

エルヴィン・パノフスキー
（Erwin Panofsky）



1892-1968年。ドイツ・ハノーヴァー生れ。1926年よりハンブルグ大学に在職、ヴァールブルグ研究所との交流をもち、図像解釈学（イコノロジー）の手法を用い、広範な分野において文化史的美術研究を進める。1931年より渡米、ニューヨーク大学、プリンストン大学、ハーバード大学などで教鞭をとる。

ヴァールブルグ研究所：1921年、アビ・ヴァールブルク(ルネサンス美術の研究家1866-1929)によってドイツのハンブルクで創設された。実家は裕福なユダヤ人銀行家。
精神史と文化史を融合したアプローチでルネサンス美術を研究。そのために膨大な書籍や視覚資料を収集していた。

収集 → 研究

図像学

図像解釈学　Iconology

クロノス（Κρόνος, Kronos）は、ギリシア神話の大地および農耕の神である。
クロノス（Χρόνος, Khronos, Chronos）はシュロスのペレキューデースによって創作された神で「時間」を神格化したもの
　　混同されローマ神話ではサートゥルヌス（ Sāturnus）

gnaz Günther: Chronos, um 1765-75, Lindenholz weiß gefasst, Bayerisches Nationalmuseum in München

死神はなぜ鎌を持つか？

図像学

図像解釈学　Iconology

山形小林一家が、胴に描くのは何の花か？

これは何だ？　根締めか？

図像学

図像解釈学　Iconology

山形小林一家が、胴に描くのは何の花か？

各工人の言う胴模様をまとめると次のようになる。

☆倉吉（倉治長男：明治四年生まれ）　桜
☆清蔵（倉吉長男：明治二十八年生まれ）　梅
☆栄蔵（倉吉五男：明治四十年生まれ）　菊
☆吉兵衛（倉治三男：明治九年生まれ）　梅
☆吉太郎（倉治四男：明治十二年生まれ）　わからない
☆吉三郎（倉治五男：明治二十年生まれ）　梅

図像学

図像解釈学　Iconology

「飲酒」　第五首　悠然望南山

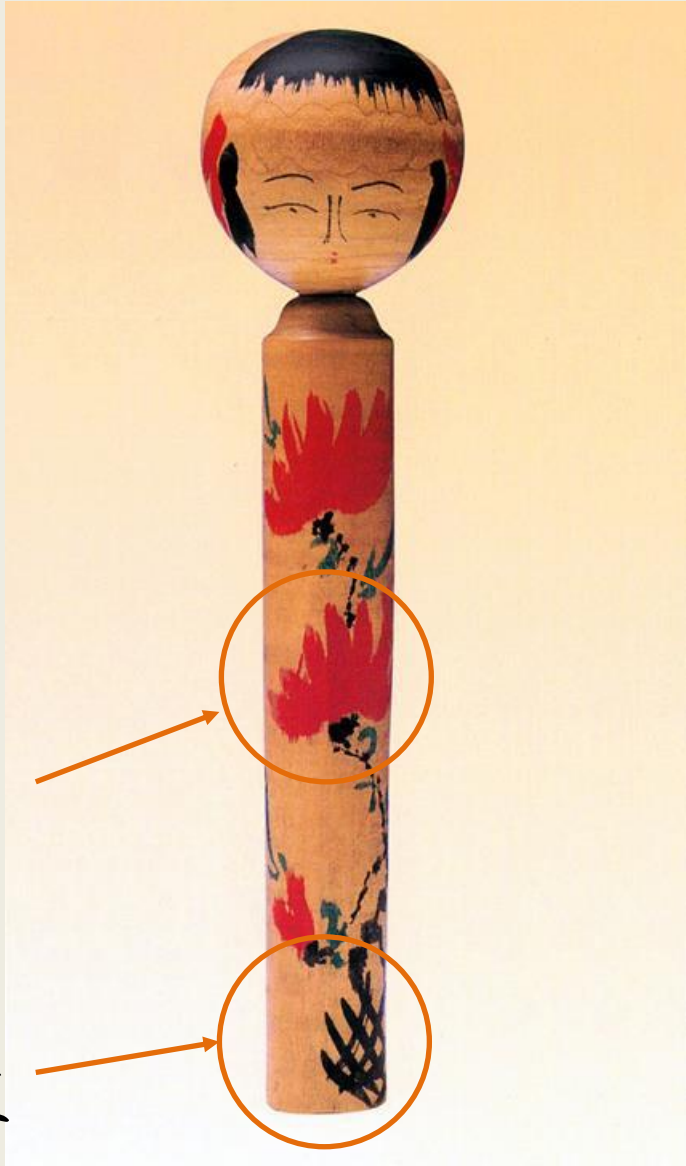
陶淵明

結廬在人境　而無車馬喧
問君何能爾　心遠地自偏
采菊東籬下　悠然見南山
山気日夕佳　飛鳥相与還
此中有真意　欲辨已忘言

図像学

図像解釈学　Iconology

一見稚拙な面描
次郎左衛門雛が手本か

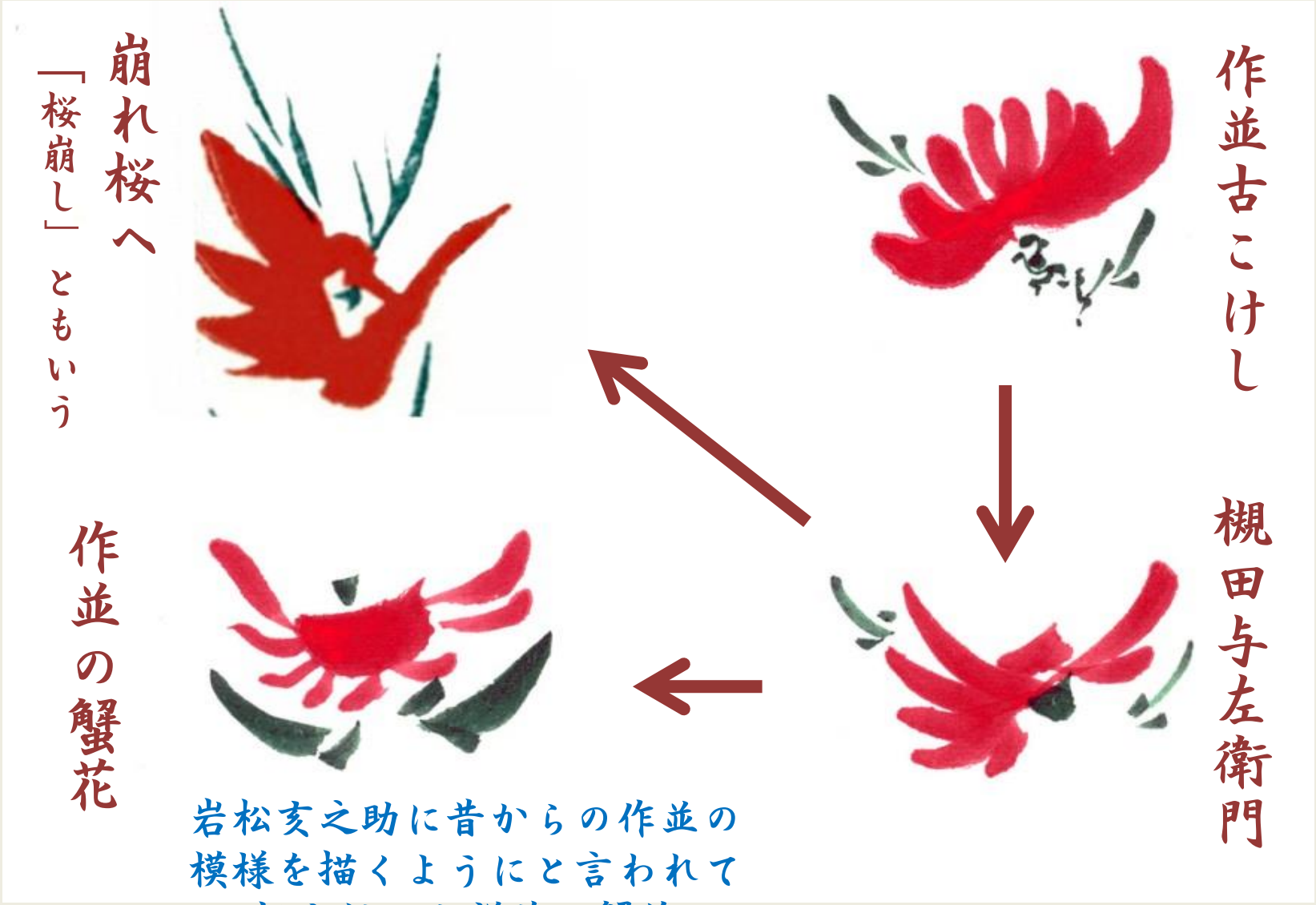


谷地の奥山広三、寒河江の鈴木安太郎の井桁も籬、花は菊

図像学

図像解釈学　Iconology

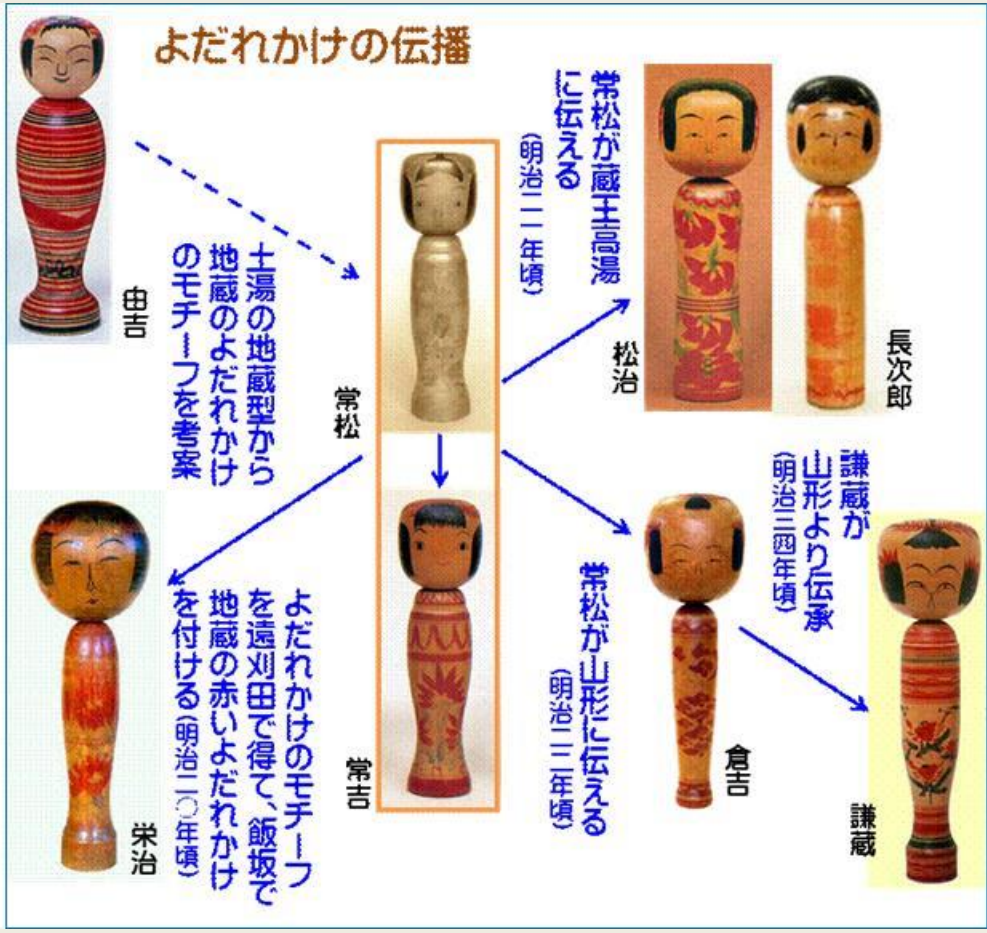
菊から桜へ



岩松亥之助に昔からの作並の
模様を描くようにと言われて
描き始めた謙蔵の蟹花

図像学

図像解釈学　Iconology



地蔵型から生まれたくびれ型の伝播とよだれかけの伝播は同じ形で進んだ。

図像学

図像解釈学　Iconology

よだれかけ

こけしと作者の我妻勝之助

斉藤松治の「よだれかけ」

梅木直美の「よだれかけ」

蔵王地蔵尊《一七七五（安永４）年の造立》
とも関連付けられて
よだれかけの描彩は蔵王に
好んで受け入れられた。

梅木直美は修一からこれが「よだれかけ」の形象であると聞いていた。
だが、地蔵由来とまでは分からなかった。

木の花以後　（１）

- 西田・土橋時代の終焉
- 大判図録の出版

  ラッココレクション　　久松コレクション
  鼓堂コレクション　　西田コレクション
  名和コレクシン　　植木コレクション
  天江コレクション

- 一金会、三土会
- ホームページでの発信

  木人子室　（ http://bokujinshi.info/ ）
  こけし千夜一夜（http://fukujyusoan.moe-nifty.com/kokeshi_fan_night2/ ）等

- 第二の古品大量流通

  ✓ 入札会・即売会
  鹿間、米浪、久松

  ✓ ネットオークション
  橘コレクション
  北陸の酒屋　須賀川骨董屋

木の花以後　（２）　第3次こけしブームへ

- 新しい波
  こけし　cochae
  こけし時代　　等
- こけしと自己表現（Facebook/Twitter/Instagram）一例
  愛好家からの発信
  - Ketchiina　（https://www.instagram.com/ketchiina/）
  - 仏像は眼鏡をかけない　（https://ameblo.jp/koikawaharumachi/theme-10061690319.html）

  作る側や店からの発信
  - Syoshihiyane　（https://www.instagram.com/syoshihiyane/　）
  - sendai_kokeshi　（https://www.instagram.com/sendai_kokeshi/　）
  - 梅木直美 ～世界を旅するMyこけし～
    （https://www.facebook.com/こけし工人-梅木直美-世界を旅するMyこけし-721713011235131/　）
  - 松田大弘　（　http://www.tomohiromatsuda.com/　）
  - Kokeshi Sakurai　（https://www.facebook.com/profile.php?id=100009569176702）

  友の会リンクリスト

  http://www.tokyo-kokeshi.jp/link/link_list.htm
- 海外でのブーム
  - KoKeshi Village　（https://www.facebook.com/groups/Kokeshi.Village/）
  - Kokeshi Trends　（https://www.facebook.com/Kokeshi.Trends/　）

（付録）　こけしブームの背景

第一次こけしブーム　（昭和15年頃）

第二次世界大戦　日独伊三国軍事同盟　太平洋戦争

⇒　戦争の時代へ

第二次こけしブーム　（昭和40年代）

イタイイタイ病　公害　70年安保　ニクソンショック

オイルショック　⇒　高度成長の終焉

第三次こけしブーム　（平成20年代）

高齢者社会　少子化　格差社会　過疎地域

不安定な国際情勢　⇒　戦後の秩序の限界

社会不安が一定レベルに近づく時期に

“こけしブーム”は起こる

（付録）　こけしブームと新世代

第一次こけしブーム　　（昭和15年頃）

深沢要、渡辺鴻　（ほぼ40歳）
西田峯吉（ほぼ45歳）　鹿間時夫（ほぼ33歳）

第二次こけしブーム　　（昭和40年代）

箕輪新一、橋本正明、高橋五郎（ほぼ20代前半）
一金会の古参メンバー（20代から30代）

第三次こけしブーム　　（平成20年代）

今の30～40代

ブームの時代に次の世代に
繋ぐひとの養成が行われる

こけしを日本遺産に

日本がリオ五輪で、盛り上がりを見せていましたが、メダルのせいばかりではなく、これは東京五輪に向けての助走といってよいでしょう。そして日本政府は2020に向けて100の日本遺産を作ることをめざしています。現在までに57件の日本遺産が認定されています。日本遺産は日本の伝統文化を語る、ストーリーを認定し、地域の文化財を点から面への展開として、保護でなく活用を目的としています。その地域に根差して継承保存され、受け継がれている伝承・風習を踏まえたストーリであることが必要です。

認定されれば京都府が申請して、認定された「日本茶800年の歴史」などと共に、持ち帰ることの出来る日本遺産として、国家戦略である、インバウンド対策としても、大きく貢献でき、また東北の活性化にも期すると思われます。現在この運動を展開しております、ご支援のほどお願いいたします。　箕輪新一・橋本正明・鈴木康郎・池上明